



こんなんでもいいんすか。

ボウの王子様 I

柄にもなくガチな
アドバイスしちゃった
気がする

ボクの王子様

まんが: きんぎん 原作: ねぎしお

いつもの事務所

それならなおさら
獅子から誘うべき
じゃない？

小梅、喜ぶと思うよ

そ、そうか…

杏さんに
相談して
よかった…

にへえ

フビ…
やつぱり、

まあ、
参考にすればーって
くらいだから

ま、まあ、
いいや…
他にもっと適任が
いると思うけど…

ガキヤ

とりあえず、
頑張れー

あ、ありがとう…
頑張る…フビビ

はいよー…
獅子も律儀だねえ…
ふわぁー

さて、
適当にしたら
してよっと…

…今日は暖かいし、
絶好のだから日和だー！

今日みたいな日が
1年中続けば
いいのに…

カワイイボクが
帰ってきましたよ！

……寝よう

ちよっと！
無視ですか！

オオオオオオ



そうですね…
少しゆっくり
しましょうか

すわる

今日は何の
仕事だったん？

撮影のお仕事です！
こんなカワイイボクを
近くで撮影できるなんて
カメラマンさんは幸せですね！

せやな

…杏さんって、ボクが
こういう事言う時の反応
毎回適当ですよな

気のせい
気のせい

もっと反応
してくれても…

ちよ…
分かった
分かった

ちよつと
弄っただけ
だから

誰かかくても…

ふ、ふふーん！
分かりました！
好きな子に意地悪したく
なっちゃうアレですね！

もう、
しょうがないですね！

素直になってくれていいのに！



じゃあ適当に
ジュースでも





杏さんの服選びに
シヨッピングとか
付き合っただけでも
いいんですよ！

おすす

いや、別に……
さっき言ったけど
服には困ってないし

それに、
予定がないなら
家でだったら
してるのが
一番じゃない？

……ぐすっ

いや、だから
泣かなくても……

分かった！
買い物行くから！

ふふふん！

やっぱり
ボクとお出かけ
したかったんですね！

仕方ないから
付き合っただけですよ！

なんて手の
かかる子なんだ……！



それは杏さんが
決めてください!





まあ評価は
迫々回復させる
としましょう…

かなり強引でしたが
これでデート権を
手に入れましたよ…



ああ緊張した…



『ボクの王子様！』特典SS
杏『ある夏の日 その2』

杏の弟
杏『エアコンが壊れた』

杏『新しいのに取り替えられるのは
明日の夕方…』

杏『おわた！エアコン壊してどうやって
あと30時間近く乗り切れと…』

杏『まさか、自宅でこんな形で力尽きる
事になるとは…』

杏『がくっ』

杏『ピロロロリン』

杏『…小梅からメールだ…』

今日、輝子さんと幸子さんと一緒に、
飯を作りに行ってもいいですか？



杏『…』

えあこん
こわれた
しぬ

杏『…送信』

杏『がくっ』

杏『ピロロロリン』

杏『…』

エアコンが壊れたんですか…？
よかったです、私の部屋に来ますか…？
3人で待つてます

杏『…エアコン取替えまでうちで耐え
るか…』

杏『一時の地獄を我慢して、冷房が効い
てもであらう小梅の部屋に遊びに
行くか…』

杏『…』

エアコンの修理が明日の夕方なんだけど
今日、小梅の部屋に泊まってもいい？
いいなら行く

杏『…送信』

杏『暑い！扇風機じゃ…足りない…』

杏『ピロロロリン』

私は大丈夫です
輝子さんと幸子さんも、一緒に泊りしたい
そうです

杏『また睡やかな事になりそうだな…』



幸子『確かに、この時期はエアコンの修理や
取替えが多いでしょうからな』

小梅『む、羨望…どうぞ…』

杏『ありがたう、…』

生き返った。

輝子『フビィお、お様空いてるなら…』

杏『お、お願ひしようかな…期から何も
食べてないから』

幸子『朝ごはん食べて無いんですか？』

杏『エアコンの異常に気付いて、それどころ
じゃなかったよ』

幸子『…まあ、それもそうですか』

小梅『じゃ、じゃあ…飯作るから…』

杏『ピロロリン』

幸子『ボク達が素敵な朝食を用意しましょう！』

輝子『フビィ…お楽しみに』

杏『よろしく…』

杏『…』

杏『は…涼しい…』

小梅『あ、杏さん！お昼ご飯…出来たよ！』

輝子『フビィ…お待たせ』

幸子『ホネーンホネーンですわ！』

杏『やっ、やっ、待つてたよ、それで、気になる
メニューは…？』

小梅『トマトとツナの冷製パスタと…』

夏野菜サラダだよ』

杏『お、美味しそう』

輝子『な、夏だからね、冷たいものがいい
と…思っで』

幸子『料理をさせてもカワイイポケー』

杏『アップハイ』

幸子『もつとりアクションキー…』

小梅『え、えっ…食べよう！』

幸子『む、そうですね、ポケとした事がつい』

輝子『フビィ…』

杏『…』

杏『…』

杏『…』

杏『…』

杏『…』

杏『…』

杏『…』



杏「んじや早速いただきますー」
 小梅「いただきますー」
 璃子「いただきますー」
 幸子「いただきますー」
 杏「するする……んー、いけるいける」
 小梅「えへへ……よ、よかったー」
 杏「冷たいのと熱つばいのが良い感じだし、
 これなら夏の間毎日でもいけるかも」
 小梅「お梅曰く……」
 幸子「気持ちが良いですけど、流石に違う
 物を食べた方が……」
 璃子「元々具を変えれば……梅曰く冷製
 パスタにできるかもしれない」
 幸子「なるほど」
 小梅「う、梅と大塚……とか……」
 杏「ああいいね、それも美味しそうだ」
 杏「……ちそうさまー、いやー、美味しかったよ」

幸子「これからどうしますぞ？」
 杏「んー、何かして遊ぶぞ？」
 小梅「な、何か……いいかな？」
 璃子「私は……なんでもいい」
 杏「じゃあ、夏らしくホラーゲームでも
 やるー？」
 小梅「あつ……や、やる……」
 璃子「アビビ……杏さんがホラーゲームやる
 の……見るの好き」
 杏「何かみんなで出来るヤツあるぞ？」
 小梅「んーんー……私が持っているのは……一人用
 のだけ……から……」
 杏「じゃあ、順番に選んでいく感じで作って
 いこうか」
 璃子「そ、それがいい……フヒ」
 幸子「あ、ああああのっ……ホ、ホラーゲーム
 じゃなくてもいいんじやないですか
 ね……」
 杏「夏と杏んはホラーゲームだよ」
 小梅「う、うん……カーテン……締め切っ……
 やらう……」
 璃子「アビビ……本格的」
 幸子「ホッ……じや、じやあ、ボクは見てる
 だけでいいの……」
 杏「最初は幸子ね……」
 幸子「話を聞いてくださーい……」
 4時間後――
 杏「よし、クリアー」
 璃子「元々……や、やったね」
 小梅「面白かったね……」
 幸子「あ……ああ……」
 杏「人懐っこい……」
 璃子「お、大丈夫……」
 小梅「もう……お終わった……」



幸子「……怖くない！怖くないですよ……
 あはは……」
 杏「アカン」
 小梅「ど……どうしよう……？」
 杏「はあ……しょうがないなあ」
 幸子「……幸子カワイイ（ボソッ）」
 幸子「ですよー……もうっ、杏さんもそう
 思ってるなら普段から遠慮せずに言っ
 てくれていいですよー」
 璃子「アビビ……潔くした……」
 杏「まさか本気でこれだ、いととは……」
 幸子「杏さん、もう……四回も言っつけてくれま
 せんかね……？」
 杏「幸子面白い」
 璃子「違うでしょうー」
 小梅「えへへ……お、面白い……」
 幸子「小梅さんまで……」
 杏「にしても、もう……つかりたあねえ」

幸子「まだ外は明るいですけどな」
 璃子「カーテン締め切ってたから……
 分からなかった」
 小梅「あ、杏さん！今日、泊まるんだよねー」
 杏「うん、小梅がいいならそうしたい」
 小梅「う、うん、私は……大丈夫……」
 幸子「杏さんがお泊りするなら、ボクもお泊り
 しますよー」
 璃子「アビビ……わ、私も」
 杏「エアコンが使えない部屋で……一晩……す
 なんて考えられないからねー」
 杏「今日はお世話になるよー」
 小梅「じゃ、じゃあ……よろよろ……晩ご飯の
 準備……しない？」
 杏「おお、何作るの？」
 小梅「え、えつと……カレーで……いいかな……？」
 杏「やっ、やっ、カレー……好きだよ」
 小梅「えへへ……よ、よかった」
 璃子「アビビ……まだ、3人で作る……」
 幸子「そうですねー！役割分担しましょうー」
 杏「お、杏は選んでいい感じ」
 小梅「う、うん……出来るまで……ゆっくり……
 して……」
 杏「（ゴロン）……よろしく……」
 幸子「本気で手伝う気ないんですね……」
 杏「……」
 幸子「もう寝てる……？」
 小梅「アビビ……どうやったら……こんなに早く
 寝れるのかな……」
 璃子「アビビ……ちよつと、羨ましい」
 12時間後――
 小梅「で、出来た……」
 璃子「アビビ……やったね」
 幸子「お昼……おにぎり、食心の出来ですわー」
 小梅「あ、杏さん……お……さ……ない……」

幸子「皆さん、ご輸出来ましたよ」
 杏「んーあと12時間」
 幸子「明日の朝までずっと寝るつもりですか」
 瞳子「フビビ…ね、睡すぎ」
 小梅「そ、そんなに寝れない」
 幸子「もう、本当にどうたらなお姉さんなんですから」
 幸子「皆さん、起きて下さい！地ご飯ですよ！カワイイポケが作ったカレーですよ」
 杏「うーん…夏が終わったから起して」
 瞳子「フビビ…の、伸びた」
 幸子「なんでですかー」
 杏「ふわあ…あ、良い匂い」
 小梅「あーお、起きた」
 幸子「おはようございます、地ご飯できましたよ」
 杏「やっぱり、冷房の効いた部屋でゆっくり寝て起きたらご飯が出来てるなんて、なんて幸せなんだ」
 幸子「ポケ達に感謝して下さいね」
 杏「おかつてるよ、ありがと、小梅、瞳子」
 小梅「えへへ」
 瞳子「フ、フビビ」
 幸子「ですからポケを無視して遊ぶのはやめて下さい」
 杏「お眠りなつて、幸子もありがと」
 幸子「ん、ふふーんと最初から、恥ずかしがらずにお礼を言ってくれて、いいんですよ」
 杏「アハハ、さ、カレー食べよう」
 小梅「くのぬぬぬ…」
 瞳子「え、えっーじや、じやあーいただきますます」
 杏「いただきます」
 瞳子「フビビ…いただきます」



幸子「観察としませんが…いただきますつ」
 杏「もくもく…ん、うますま」
 瞳子「夏は暑いけど…カレーだけは…何故か食べたくなるな…フビビ」
 幸子「例でしようねえ」
 小梅「冷房が…効いてる所で食べないと汗が止まらない」
 杏「今の杏の家でカレーなんて食べたらず中で倒れるよ」
 幸子「真夏に冷房のない部屋でカレーなんて、まるで何かの修行のようですね」
 杏「他にも、結構きょうどんとかね」
 瞳子「フビビ…絶対嫌い」
 杏「かう…ちそうさまー」
 小梅「うらちそうさまでした」
 瞳子「フビビ…ちそうさまでした」
 幸子「うちそうさまでした」
 杏「美味しかった」
 小梅「えへへよ、よかった」
 瞳子「み、みんな…食べるぞ」
 美味しい…フビビ」
 幸子「どうですわっ」
 小梅「みんな、お風呂入るー」
 杏「あ、入りたいかな、ここに来るまでに汗かいたし」
 幸子「ポケも入りたいですねー目一回はお風呂に入らないと」
 瞳子「お、お風呂は…大層」
 小梅「じや、じやあーお風呂に入れるわー」
 幸子「浴室には入一組には入れないですよ」
 杏「二人ずつ順番でいいんじゃないか」
 瞳子「フビビ…どうしようか」
 小梅「あ、皆さん…先に…どうぞー一番…汗かいてる…」
 杏「そう悪いわー」





幸子「では、ボクが杏さんと一緒に入りま

しよー！お背中流しますよー！」

杏「おし、よろしく！」

小梅「じゃ、じゃあーその後に…私と…

藤子さん！」

藤子「フヒ〜オッケー！」

幸子「では、洗い物を片付けたらお風呂に

しましようか！」

杏「お！」

「お風呂タイム！」

幸子「杏さん、背中流しますね！」

杏「よろしく！」

幸子「こうして、杏さんと2人でお風呂に

入るのって、初めてですねえ」

杏「どういふはそうだったか！」

幸子「ホー！ん！カワイイボクと一緒にお風呂に入れるなんて、杏さんは幸せ者

ですね！」

杏「え？うめん、お通流すまで

よく聞こえなかった」

幸子「ふ、ホー！ん！カワイイボクと一緒にお風呂に入れるなんて、杏さんは幸せ者

ですね！」

杏「あ、ごめん、家のエアコンの事考えてて

聞いてなかった」

幸子「聞こえてますよね？わざと

やってますよね？！」

杏「バレた」

幸子「もう！！」

小梅「か、痛い所…ある…？」

藤子「フヒ…大丈夫……」

小梅「きよ、今日は…楽しかったね！」

藤子「そ、そうだな」

小梅「杏さんの方から遊びに来てくれる事、

め、嬉しいーから！」



藤子「も、元々は…今日も、私達が杏さんの

車に行く予定だったしね！」

小梅「うん…エ、エアコンが故障なんて…

大変！」

藤子「明日には新しいのなるって！」

杏「うたね」

小梅「さ、うん…これで、杏さんも…大丈夫……

藤子「え、また今度は…3人で杏さんの家に遊

びに行こう…フヒ」

小梅「うん……」

小梅「ほう…さ、さっぱりした！」

藤子「フヒ…あ、あがつたよ！」

杏「おか」

幸子「さて、寝るまで何しませうか？」

小梅「ホ、ホー！映画…見たいな…」

幸子「ひえっ！」

藤子「フヒ…いいね……」

杏「おし、今日は…日ホケー…三昧だねえ」

小梅「み、みんな…見たいと思ってた！

映画があるの……」

杏「ほほ！」

藤子「ど、どんな映画かな！」

幸子「い、い、ほほらあの、お風呂にもホラー

ゲームしたばかりです！」

幸子「次は…とこ、平和的な……」

小梅「ふ、これ…なんだけど……」

藤子「フヒ…や、やばそう……」

杏「お、おお！…これはなかなか」

幸子「ひいっですすから！ですから……」

杏「幸子、覚悟を決めるんだ」

藤子「フヒ…長い夜になりそうだな……」

幸子「ひええ、助けて……」

おしり

こんまんでいいんすか。

